

ナチュラルキス+^{plus} 6

Keishi & Saboko

風

fuu

termity



エタニティ文庫

Contents

ナチュラルキス+^{plus}6 5
～ side Keishi ～

希望の涙 295

ナチュラルキス_{plus} 6

～ side Keishi ～

1 ふくれっ面にデイーブなキス

こんなにも穏やかな気持ちになったのは、いったいいつぶりだろうか？
 ハンドルに軽く手をかけて運転しながら、佐原啓史は小さく微笑んだ。
 彼の隣には、長い間想いを寄せていた相手がちよこんと座っている。

彼女は啓史の教え子でもあり、婚約者でもある榎原沙帆子……実はまだ高校二年生なのだが、三日後には自分と結婚式を挙げることになっている。

事の始まりは、先月のバレンタインデーだった。その日、いまでも信じられないが、結婚話が持ち上がり、いまに至っている。

長いこと沙帆子への想いを断ち切れず、最悪な日々を過ごしていたものだから、この夢のような現実を喜んでいる余裕などなく、それどころか重い不安を抱き続けている。

沙帆子が啓史のことを前から好きだったというのなら、不安など覚えずにすむのだが、残念ながら現実はそのようではない。彼女には本命チョコを渡したいほど、好きな男が他にいたのだ。彼女の同級生であり、生徒会の副会長でもある広澤脩平。ムカつくが、

容姿が整っているうえに性格も良い好青年だ。

広澤のほうも沙帆子を悪く思っていなかったわけで、何事もなければ、ふたりはバレンタインデーの日に付き合うことになったんだろう。

そんなふたりの間に、啓史が強引に割り込んだ。

広澤に対して罪の意識を感じないでもないが、沙帆子は絶対に譲れない。

バレンタインデーの日、こいつが具合を悪くしていなかったら……いまこんな状況にはなっていないんだよな。

ちらりと沙帆子を見て、ほっと息を吐く。

奇跡ともいえるような道を、ビクビクしながら歩んできた。だが、それも残りあと三日……

いや、気楽に考えるべきじゃないな。まだ三日もあるのだ。それまでに、沙帆子の気持ちが変わらないという保証はどこにもない。

こいつが嫌だと言えは、その場で結婚話は消滅する。

やれやれ……さっきまで穏やかな気分だったのに……

だが、油断しては足元をすくわれかねない。結婚式が無事に終わるまで、気を引き締めていなければ……

突然、パチンという音がして啓史は驚いた。

なんだ？何か叩いたような音だったけど……

ここには啓史と沙帆子しかない。つまり、音の発生源は沙帆子でしかありえない。

「何やってる？」

「な、な、なんでも」

やたら焦った声^{あせ}が返ってきた。

ちらつと沙帆子を確認すると、何やら顔の前で両手を振り回していた。

「虫でもいたのか？」

「い、いえ……そ、そんなもの、い、いませんけど……」

なら、なんだったんだ？

さらに追及しようと口を開きかけたが、先に沙帆子が「あ、あの」と、話しかけてきた。

「わたしたち、どこのお店に……」

「俺とこ」

沙帆子は「え？」と驚いた声を上げ、すぐに「あ、ああ」と納得したように返事をする。

どうやら、啓史のマンションの近くにある大型ショッピングセンターに行くことを、

汲み取ってくれたらしい。

これから沙帆子の買い物物に付き合うことになっている。彼女のバジヤマを買いに行くのだ。

行きたい店があるのか一応聞いたが、どこでもいいと言うので、大型ショッピングセンターに連れていくことにした。あそこなら学校から離れているから、知り合いに目撃される可能性は低いはずだ。

それでも、このままでは行けないよな。スーツの俺はいいとしても、沙帆子は学生服を着ている。

制服というのはひどく目立つ。制服姿の彼女と一緒に買い物をするのはかなりまずい。いま騒ぎになったりしたら、式は取りやめになってしまふだろう。

俺の部屋で、普段着に着替えていくとしよう。

そういえば、昨夜は散々だった。沙帆子の部屋に泊まることになって……もちろんそれは嫌なわけではないが……成人男性の正常な欲求を持つ自分にとっては、限界まで我慢を強いられる夜になった。

なのに沙帆子ときたら、眠れないでいる俺に、酒を持ってこようかなんて言い出すわ、赤ん坊にするように布団の上からポンポンと身体を叩いてくるわ……

ムカつくばかりでとても眠れなかった。それでも寝たふりを続けていたら、あるうとか、沙帆子は啓史の布団に潜りこんできた。そして彼女は寝ぼけていたのかすぐに眠り込んだ。

そのあと啓史は、沙帆子の誘っているようなぬくもりと甘い香りに、とことん理性を

試された。

あー、思い出したら、ムカムカしてきた。

昨夜味わわれた苦悩のいくらかでも、こいつにお返ししてやりたい。

マンション近くの信号で、啓史は右にハンドルを切った。

「えっ？ 先生、そこ、行くんでしょ？」

沙帆子が戸惑ったように言う。このままショッピングセンターに行くものだと思うっていたようだ。

「ああ。一度帰って着替えてからだ。そのほうが目立たなくていいだろ？」

沙帆子は返事をしなかった。返事がないのは、自分の言葉に納得したからだろうと思っていたのに、間をおいて、「先生、この制服じゃ目立ちますよね」なんてよくわからないことを口にする。

しつくりこないやり取りに違和感を感じる。

こいつ……まさか忘れてんのか？

「制服で学校がわかるからな。面倒なことになると困る」

沙帆子の様子を窺いながら、啓史は言葉を返した。

「でも、わたしが制服のままじゃ、先生が着替えても……」

やはりか……俺の部屋に、自分の荷物を運び込んだのに、その事実が頭から抜け落ちていくようだ。

「お前も着替えるに決まってるだろ」

「はい？ で、でも、着替えが……」

「あるだろ、うちに、いくらでも」

そう告げると、沙帆子はようやく思い出しらしい。

「そ、そうでした」

「お前……」

啓史は途中で口を閉ざした。いまの状況をまるで認識できていないな、なんて、口にしたいほうがよさそうだ。結婚に向けて動いているこの現実には、彼女の意識は危ういほど後れを取っている気がする。

俺はそれがわかっているながら、こいつが困惑しているうちに、さっさと結婚式までこぎつきたいなんて、狡いことを考えているんだよな。

いまは現実の認識などしなくていい。結果的に俺と結婚したことを、後悔させなければいいのだ。

いずれふたりの住まいとなるマンションに向かいながら、啓史は自分に言い聞かせた。

家に戻ると啓史はすぐ衣裳部屋に入り、自分の着替えを取り出した。

着替えを手にして振り返ると、沙帆子は借りてきた猫のように黙りこくって啓史を見つめている。

「俺は寝室で着替えてくる。お前はここで着替えろ」

「はい」

立ち竦すくんでいる沙帆子を衣裳部屋の中に押し込んで、啓史はドアを閉めた。

数秒、その場で耳を澄すませていたが、沙帆子が着替えている気配はない。もう一度ドアノブに手をかけようとして、啓史はためらった。手をぐっと握り締めた彼は、寝室に足を向けた。

着替えを終えた啓史は、脱ぎ捨てたスーツを放りっぱなしにしたまま、ベッドに仰向けになって天井を見つめた。

沙帆子はいま俺のマンションにいて、俺と買い物に行くために着替えをしてる……

「冗談みたいだよな」

けれど、これは現実だ。

結局、現実を認識できていないのは、俺も同じなのかもな。

ぼうっと天井を見つめていると、携帯が鳴り出した。

かけてきた相手を確認した啓史は、眉をひそめた。結婚式を挙げる予定の教会からだ。

「……
いったい俺になんの用だ？ 何か困った事態が起きた、なんてことじゃないという
身を起こした啓史は、携帯を耳に当て、いくぶん緊張しつつ口を開いた。

「はい。佐原ですが」

「佐原様、こんにちは」

教会の牧師の弟のようだ。牧師と牧師の弟は双子で、声もそっくりなのだが、話し方の雰囲気きづなで弟のほうだとわかる。

「はい。あの、何かありましたか？」

「式の準備は着々と進んでおりますよ」

「ああ、そうですか」

そんな報告をするために電話してきたのだろうかと思っていると、聞きたいことがあると言っ

「何を？」

「ご招待なさる皆様に、何か記念品のようなものをご用意なさる予定はございますか？」

「記念品？」

「はい。そのようなご予定がおありでしたら、式の次第に盛り込んでおく必要がございますので。いかがでしょうか？」

「そうか、記念品。考えてもみななかったが……」

「それは……」

『必要なのですか？』と尋ねようとしたが、啓史は質問を変えた。

「そうですね。ですが、記念品となると……どんなものがいいのかな？」

披露宴は一年後に開くことになっているが、今回の式だって適当なものにしたくない。「それはもう、おふたりの、皆様に対する感謝の気持ちがいれば、どんなものでもよろしいのではないかと思います」

皆への感謝の気持ちか……

「わかりました。それじゃあ、何か用意します」

「ちょうどこれからバジヤマを買いに行くんだし、ついでに記念品もふたりで選ぶとしてよう。」

「それで、そちらに持ってゆくのは当日の朝でも構いませんか？」

「ええ。ご新郎様にご用意させていただく部屋で、私に直接お渡しいただければ」

「わかりました。あの、この記念品のことは、両親にも内緒にしておいてもらえませんか」

「ああ。はいはい。ご両親にもご用意なさるんですね。わかりました。お渡しするまでは極秘ということで承りました。では、当日お待ちしております」

「はい。こちらこそ、よろしく願います」

かなり忙しいのか、牧師の弟は啓史がそう言った途端、すぐに電話を切った。

もしかすると、沙帆子と啓史の結婚式で、一番忙しい思いをしているのは、この牧師の弟かもしれない。

啓史は、てんでこ舞いな牧師の弟の様子を思い浮かべて苦笑し、他に用意すべきものはなかったか考えたが、特に何も思い浮かばなかった。

「うん、大丈夫そう……だな」

納得するように呟いた啓史は、時間を確かめ、またベッドに寝転がった。そして組んだ手の上に頭を乗せた。

結婚式が終わったら、ここに沙帆子連れて帰ってきていいんだよね？

それはもちろん、当然のことだが……

望みがあまりに容易に叶うようで、逆に不安になる。

おい、啓史、何を弱気なことを……。念願が叶うんだぞ。どこまでも強気で行け！

婚姻届は、沙帆子の母親である芙美子が用意してくれることになっている。啓史は印鑑を用意しておき、当日サインするだけでいいはず。そして、その日のうちに役所に届けるつもりだ。

そのためにも、何を忘れても、印鑑だけは忘れるわけにはいかないな。

啓史は時計を見て、ベッドから起き上がった。沙帆子が部屋に入り、八分以上過ぎた。ちっとも出て来る様子がないが、さすがにもう着替えは終えているだろう。買うものが増えたのだ、急がなければ……立ち上がった啓史は、沙帆子のいる部屋に向かった。

「着替え、終わったか？」

「は……いいえ、も、もうちょっとです」

慌てた沙帆子の返事が聞こえてきて、啓史は顔をしかめた。

普通だったら、着替えにこんなに時間がかかるはずがない。ということとは、着替えもせずに、何やら考え込んでいたということになる。それは、俺にとつてあまり喜ばしくない内容なんだろうな。

「時間がなくなるぞ。急げよ」

心中穏やかではなかったが、啓史は軽く催促せいきしてその場を離れた。

「あ、はい」

それからしばらくして、ようやく沙帆子は出てきた。

「先生、待たせちゃってごめんさい」

「ああ。行こう」

沙帆子を急せかして玄関に向かう。

先に靴を履いていた啓史は、彼女の学校規定の黒い靴を見て顔を上げた。

「靴は？ どれか別の履いてくдарろ？」

靴箱を開けながら、啓史は沙帆子に尋ねた。

「は、はい。それじゃ、これ」

靴箱の中から、沙帆子は茶色の靴を取り出した。

彼女が履いたのを確認し、外に出ようとしたが、「先生」と呼ばれて、啓史は振り返った。

「あの、わたし、この服でよかったですか？」

啓史は眉を寄せて沙帆子を見つめた。

「どうして？」

「ど、どうして……だって、これって、全然おとなっぽくないなって……」

不服そうに言う沙帆子に、啓史は眉をひそめた。なぜ急にそんなことを言い出したのか、わけがわからない。だいたい、その服を選んだのは自分だろ……

「おとなっぽくないじゃないのか？」

沙帆子の言葉の真意がわからず、啓史は首を傾げかつつ聞き返した。

「だって、釣り合い取れてないかって……」

釣り合い？ 俺と……ということか？

「馬鹿馬鹿しい。行くぞ」

沙帆子の発言にムカついた啓史は怒鳴るように言うと、さっさと外に出た。

「先生が嫌じゃなかったら、いいんです」

玄関の鍵をかけていると、啓史の後ろに立っている沙帆子がぼそぼそと口にした。振り返って目を合わせる。

「俺？」

そうじゃないだろ？ 気にしているのはお前じゃないか……

「お前、俺と釣り合い取れないのが、気になるんだろ？」

俺でなく、広澤となら釣り合いが取れるんだろう。そんな風に考えてしまい、胸がもやもやする。

「だ、だって、わたしの服装って、子どもっぽいから……」

「お前は好きな服を着ればいいんだ。ひとがどう思うかなんて些細なこと、気にするな」
釣り合いなどクソ食らえだ！

啓史は憤りながら歩みを速めた。

「些細なことじゃないもん。先生の好みの服、着たいって思うんだもん」

沙帆子の言葉に啓史は足を止めた。そして、ゆっくりと振り返る。

「俺の？」

俺の好みの服が着たいって？

頬を膨らませた沙帆子は、こくりと頷く。

ふくれっ面をする彼女の態度に思わず顔がにやけそうになり、啓史は顎にぐっと力を入れた。そっけなく「ふーん」と口にする。

まだふくれている沙帆子の手首を掴み、啓史は強引に歩き出した。

「怒ってるんですよ」

啓史のふるまいが気に食わないらしく、沙帆子の怒りはふくらむ一方のようだ。

真剣に怒っている沙帆子には悪いが、こんな彼女の様子は好ましい。

「ああ。見ればわかる」

「お子ちゃま扱いしないでください」

お子ちゃま扱い……？ そんなことした覚えはないが。こいつだって、された覚えなどないはずなのに……

俺はいつだって、沙帆子を女としてしか見ていない。

「別に……してないだろ」

「してるっ！」

怒鳴る沙帆子を放っておいて、啓史は運転席のドアを開けて車に乗り込んだ。

沙帆子のほうは、啓史を睨んだまま身動きしない。

啓史は、さっさと乗るよう促した。

沙帆子は腹立ちを見せつけるように肩を怒らせ、大股で助手席のほうへ回り、わざとらしい乱暴な仕種しくさで車に乗り込んできた。
笑えた。

そしてそんな沙帆子が愛らしい。

啓史は、沙帆子の唇を塞ふさいだ。彼女に驚く暇を与えないほど突然に――

お子ちゃま扱いなどするつもりはないということを、啓史はディーブ過ぎるキスで思
い知らせた。

「子ども扱いしてるか？」

唇を離して顔を上げた啓史は、突然のことにあわあわしている沙帆子を見つめ、にやりと笑いかけた。

2 楽しくお買い物

衣料品売場は平日だからか、客はまばらで、パジャマ売場には彼らの他に誰もいなかった。

沙帆子が熱心に見て回っている間、自分もパジャマを眺めていた啓史は、バスローブ

を見つけ、ふいに足を止めた。

バスローブか……これは風呂上がりに着るものだよな。

パジャマなんかより、こっちの方が断然、脱がせやすそうだ。

顔がにやついていることに気づいた啓史は、自分を律するように顔をしかめた。

沙帆子に見られたのではないかと思っうかがてみたが、彼女はパジャマを夢中で選んでいた。

ほっと息をついた瞬間、何かを感じたかのように沙帆子が振り向いてきてどきりとする。

「先生、どれがいいと思いますか？」

啓史は眉を上げた。

どれがいいかだって？ そりゃあもちろん、脱がせやすい真っ白なバスローブだ、と言いたいところだが……

「お前はどれがいいんだ？」

「わたし？」

沙帆子は目の前にある赤い花柄のパジャマを見つめて、悩み始める。それがいいのかわかったら、すぐに別のものに視線を向ける。そっちはピンクの無地だったが、リボンやフリルがたっぷりつついている。

うん、花柄よりこっちのほうが可愛いな。

「これか？」

ピンクのパジャマを指して聞く。

「ま、まあ。可愛いかな、とは思いましたけど……」

まだ決めかねているのか、沙帆子は迷いつつ言う。悩む必要はなさそうだが……

「いいんじゃないか」

「先生、他のも見てから」

ピンクのパジャマを手を取ろうとしたが、沙帆子に止められた。

「他の？」

啓史は眉を寄せて口にした。

別に、これでいいと思うのだが……

「先生……わたしのパジャマになんか、まるで興味ないみたいですね」

不満そうに沙帆子と言う。

もちろん興味がないわけがない。いずれ沙帆子が身に着けた姿を見られると思うと楽しみで仕方がない。だが、時間が限られているから彼女の気が済むまで待つてはいられないのだ。これから記念品を選ばなければならぬ。

「時間がないだけだ。それに、そいつ、悪くないぞ」

「時間がないって、仕事が忙しいんですか？」

「いや。電話もらったんだ」

「電話？」

「来てくれたみんなに、記念になるものを渡したらどうかと、提案を受けたんだ」

「記念になるものですか？」

「ああ。それほど高価なものじゃなくて……」

そこまで口にして、まだ結婚の記念品だという説明をしていないことに気づく。

「ただ俺たちの結婚の記念に……」

照れくささが込み上げて、啓史はぼそぼそと口にした。

沙帆子の反応をさりげなく窺うと、ほんのり頬を染めている。思わず口元がゆるんでしまう。

「何がいいか探さなきゃならないからな。全員に同じ品を渡すのがいいと思うんだが、お前、どう思う？」

「で、でも……あ、あの……」

どうしたのか沙帆子が急に落ち着きを失くした。訝しんで見ていると、沙帆子は右手でポケットを押さえた。ポケットの中には、財布が入っているようだ。

こいつ、金のこと気にしてるんだな？

苛立ちが湧いた。金のことについては、すでにふたりで話し合い、解決できたと思っ
ていたのに……

「沙帆子」

苛立っているせいで、少しきつい口調になってしまった。沙帆子はうろたえた様子で、
「は、はい？」と返事をした。

目が泳いでいる沙帆子に、ますます苛立ちが強くなる。こんなことで、うろたえたり
して欲しくない。

「金のことは心配することないぞ」

情けない顔で自分を見上げてくる沙帆子に、怒りが爆発しそうになったが、啓史は
ぐっと拳を固めて気を静めた。苛立ちに任せて沙帆子を怒鳴りつけては事態は悪くなる
だけ、それよりもここは安心させてやるべきだ。

「前にも言ったろ。土曜日からは、俺の金でふたり暮らすんだぞ。俺に対して、金のこ
とで遠慮なんかするな！」

落ち着いて話すつもりだったのに、つい語尾が鋭くなる。

沙帆子が怯えて身を竦すくませているのを見て、啓史は自分に失望した。

自己嫌悪おちいに陥る前に、この場の雰囲気をよくすることを考えなければ。

「でも……わ、わたし、貯金……」

ちよ、貯金だあ!?

カッとした啓史は、この場を穏やかに収めようとしていたことも忘れて、沙帆子の額
をパチンとはたいていた。もちろん、手加減はしたが……

「あたっ」

「もうお前に任せてらんねえ。俺が選ぶ」

苛立ち紛れにそう宣言し、ピンクのパジャマを手を取った瞬間、啓史はバスロープの
ことを思い出した。

そうだ。イライラさせられた仕返しに、こいつを驚かせてやろう。

パジャマを元の場所に戻し、バスロープが陳列されている棚に歩み寄り、ガシッと掴
んで戻る。

「これにする。行くぞ」

そっけなく告げると、沙帆子は目を丸くして「えっ？ ええっ？」と叫ぶ。

「せ、先生。それ……」

「わかつてる」

沙帆子の反論を遮せりぞってレジに向かおうとした啓史は、いったん足を止めた。

こうなりや、いつそ自分のも買うか……

いい案のように思えた。

同じデザインの自分に合うサイズのものを手にし、啓史は再びレジに向かった。

沙帆子は困惑しているらしく、金を払う啓史を黙って見ている。

支払いを終えて包みを受け取った啓史は、沙帆子の腕を掴んで歩き出した。

「先生、それ、パジャマじゃないですよ」

啓史に引つ張られて歩きながら、沙帆子は諭すように言う。

そんなことわざわざ言われなくても、わかっている。

「ああ」

啓史は平然と言葉を返した。

「だから、バスローブですよ、それ」

さらに念を押すように言われ、今度は危うく噴き出しそうになる。

「そうだな」

「な、なんでバスローブなんですか？ パジャマ買いに来たんですよ」

「俺の好みの……だろ？」

啓史の言葉に対して、沙帆子はなんと答えていいのかわからないように口ごもっている。

「……そ、そうだけど」

「なら、なんの文句もないだろ？」

沙帆子は納得できないようだったが、反論できなくなったらしく黙り込んだ。

そんな沙帆子を見つめつつ、彼女がバスローブを着た姿を想像してみようとしたが、残念ながらうまく思い描けない。

顔をしかめた啓史は、こんなことをやっている場合ではなかったと思い出し、売場を見回した。とにかく早いところ記念品を選ばなければ……

「沙帆子」

肩を並べて歩いている沙帆子に呼びかけると、何か考え込んででもいたのか、焦った

ように「は、はいっ」と答えた。

「記念品、何がいいと思う？」

改めて意見を聞くと、沙帆子は眉を寄せて考え込む。

啓史はいったん足を止め、彼女と向き合った。やみくもに売場の中をうろついても意味はない。

「先生は何かいいと思います？」

「さっぱり思い浮かばないな。招待客の年齢も様々だし、男女ともにいるわけだし……でも記念品なんだから同じ品のほうがいいんじゃないかと思う」

「ですよね」

そこでふたりで黙り込む。

しばしその場で考え込んだものの、何も思い浮かばない。沙帆子も同じようだ。仕方がないので、専門店を一回りしてみることにする。

結婚式の記念品を売っていいような店をあちこち見て回るものの、なかなかこれといったものが見つからず、あつという間に一時間ほど過ぎてしまった。

「参ったな」

「記念品にちょうどいいものって、なかなか見つからないですね」

「ああ。だが、なんか買わなきゃな」

じっくり探すだけの余裕があればいいが、式は三日後……なんとしても今日中に買わなくては。

「先生、あつちに雑貨のお店がありますよ。けっこう大きいみたい」

沙帆子の言う方向に目をやると、かなり大きな雑貨屋があった。いろんなものがごたごたと店先に並べてある。

「行ってみるか」

「はい」

遠目には乱雑な感じに見えたが、実際に店に入ると、中はコーナーごとに綺麗に区分けされていた。それでも足元には色んなカゴがあり、売り物が山のように積まれている。狭い通路に置かれていたから、それらを蹴飛ばさないと進むのは骨が折れた。今日は客

が少ないからまだいいが、混雑していたら入るのをためらっただろう。

沙帆子はこの店が気に入ったのか、商品を手にとって瞳を輝かせている。啓史はそんな彼女を楽しく見つめながら、あとをついていった。

「先生、フォトスタンドと違ってどうですか？」

啓史は沙帆子が指しているフォトスタンドに目を向けた。確かにデザインが洒落しゃれていて、贈り物にはいいのかもしれないが……どう見ても女性用だな……。親友の飯沢敦いづみあつしあたりは、こんなもの貰ったところで喜ぶとはとても思えない。

「お前の両親にも、俺の家族にも、ひとりひとりに渡したいし……そうなるよこれは……どうだろうな？」

「ああ、それはそうですね」

「役に立って、なおかつ喜んでくれるものがいいだろう。記念だからな」

「贈り物ですか？」

突然横から声をかけられた。この店の店員のようだ。

五十代くらいの婦人で、派手な薔薇の柄のエプロンをつけている。

「ええ、まあ。結婚の記念に、参加者に……」

「まあ、ご結婚の。えーっと……お客様のこと？」

店員は、啓史の隣にいる沙帆子に目を向けたあと、啓史に顔を戻して言う。ふたりを

並べて見て、沙帆子が啓史の結婚相手だと信じられなかったらしい。もちろん、むっとする。

啓史は沙帆子に近づいて並び、「ええ、俺達の」と言った。店員が目を見開く。この店員、失礼すぎるな。いや、正直な反応ともいえるし咎めるべきではないか。取り繕って、心にもないことを言うような店員よりずっといい。

「ま、まあ。お嬢さん、とってもお若く見えるから」

お若く見えるのではなく、実際若いのだ。

だが、俺たちはこんな会話をするためにこの店に入ったんじゃない。

啓史は沙帆子に尋ねた。

「何を当てるか？」

「結婚の記念品でしたら、色々ありますよ」

沙帆子を促したところで、店員が急ぐように言う。正直、もうこの店に期待はしていなかったのだが……

「どんなものが？」

一応聞いてみることにする。

「そうですね。ティーカップとか、時計、おしゃれなデザインのボールペンとシャープのセットとか……あとはゴージャスなデザインのグラスなども、よくお買い上げいた

だきますよ」

「おしゃれなデザインボールペンとシャープペンってどんなのですか？」

「いろんなデザインがあるんですよ」

沙帆子が聞くと、店員は食いついてきた。

いい印象は受けなかったが、促されるまま啓史は沙帆子と一緒に店員のあとについて行った。

ボールペンとシャープペンのセットは、ありふれた感じの品だった。取り立てていいとも思えなかったし、インパクトに欠ける。

「男性用、女性用。それからお若い方用、お年を召した方用……どうです？」

ぐいぐい商品を押しってくる店員に嫌気がさし、すっぱり断ろうとしたが、沙帆子が「まあ、素敵だけど……」と言う。

まずいな……

案の定、店員を調子に乗せてしまったようだ。

「はい。そうでしょう。お値段も色々で、ご予算に合わせて……」

店員に押され気味になって汗をかいている沙帆子を見て、啓史は笑いを堪えた。

「で、でも……こ、こういうのって、あんまりもらっても使わないかも……」

おっ、沙帆子にしては上出来だ。しっかり自分の意見を言うとは。

面白いから、もう少し様子を見るか。

「そうですね。普通に売ってるものと違って、おしゃれな品ですけどねえ」

「そ、それはまあ、おしゃれではありますけどお……」

沙帆子に救いを求めるように視線を向けられ、啓史は苦笑しつつ口を挟んだ。

「これはやめとこう。ほかに、まだお勧めがありますか？」

ぴしゃりと言うと、さすがに店員もシャーペンとボールペンのセットを推すのを諦めたようだった。

「そ、それじゃあ、グラスはどうですか？ 色々な種類がありますから……」

グラスか……これもまた、ありきたりだな。

あまり期待せずに、先ほど同じように店員についてゆく。

連れてゆかれたコーナーには、たくさんさんのグラスが並んでいた。照明に反射してキラキラと輝いている。

「わあ、綺麗」

沙帆子は感激の声を上げ、グラスに顔を近づけて眺め始めた。沙帆子の食いつきっぷりに、店員はまた商魂を燃え上がらせたようだった。

「ワイングラス、シャンパングラスなどが人気なんですよ。これなどは今日入荷したばかりで……」

確かに悪くないなと思えた。年齢性別を問わない商品だ。もつともそれなりにいい値段はついているようだが。

「数はありますか？ 同じものを十三個ほど欲しいんですが」

「ええ、大丈夫だと思います」

そう言った店員は、ごてごてしたデザインのグラスを手にとって、くどくどと説明を始めた。

「すみません。自分たちで選びたいんで」

ぴしゃりと言つてやつたら、店員はようやく静かになった。

啓史は改めて沙帆子に向き、口を開いた。

「沙帆子、どれがいいと思う」

「グラスにするんですか？」

黙り込んだ店員の様子をかなり気にしながら、沙帆子は聞いてくる。啓史は内心苦笑しつつ頷いた。

「ああ。誰にでも喜んでもらえそうだし、俺はいいと思うんだが……お前は？」

「わたしもいいと思います。詩織や千里も、きっと喜びます」

江藤詩織と飯沢千里は沙帆子の友人で、結婚式にも招待している。

「で、どれにする？」

「そ、それなら……えーっと」

沙帆子はグラスをひとつひとつ確認し始めた。啓史も探してみる。

店員はふたりから少し距離を取り、嬉しそうにこちらを見ている。この様子なら購入してもらえそうだと期待しているのだろう。もちろんいいのがなかったら、その期待には応えられないが。

俺の好みからいえば、シンプルなやつがいいんだが……それだと味もそっけもないか……やっぱり多少のインパクトは欲しいよな。だが、こんな天使や花がごてごてとついているやつは願い下げだ。もっとさりげなくインパクトのあるもの……

「あの、これとか、どうですか？」

沙帆子が遠慮がちに聞いてきた。かなりシンプルなワイングラスだ。

「シンプルすぎて、ちよつとインパクトに欠けないか？」

そう指摘すると、沙帆子が謎めいた笑みを浮かべる。

うん？

「グラスの底を覗いてみて下さい」

沙帆子からグラスを手渡され、言われるまま底に目を向けた啓史は、驚いて眉を上げた。

「ハートが……」

「どうですか？ インパクト、あると思うんですけど」

啓史は同意して頷いた。

グラスの底には、よく見ないとわからない程度にハートの形が浮かび上がっていて、とても洒落しやれている。

「いいな。これに決めようか？」

ふたりのやりとりを聞いていた店員は、すかさず歩み寄ってきた。

「それはもう、最高級品ですよ。結婚式の記念には最適かと」

興奮気味に説明する。

「さ、最高級……？」

急におどおど始めた沙帆子は、いまさらグラスの値札に目を向ける。最高級品と聞いて、値段が心配になったらしい。

値段を確認してみると、二千八百円だった。

いいじゃないか。高すぎもしないし、安くもない。

「それじゃ、これ、十三個、包んでもらえますか？」

「い、いいんですか？」

心配そうに言う沙帆子の頭にそつと手で触れ、彼女を黙らせる。

「はいはい。それでは包装紙とリボンをお選びいただけますので、こちらへ」

弾んだ足取りで店員はレジに歩いてゆく。

啓史は、まだ金額を気にしているらしい沙幌子を連れてレジに向かった。包装紙とリボンは沙幌子を選び、啓史は支払いを済ませた。包装には一時間以上かかるというので、明日受け取りにくることにして店をあとにした。

「素敵なおグラスでしたね」

「ああ。まあ、あれなら、喜ばれるんじゃないか」

「あの先生？ 十三個って……十一個じゃ……」

「二個は俺達のだ。自分たちに記念品があったって、悪くないと思ってるな」

啓史は照れくささを隠すために、わざとそっけなく言った。

「せ、先生」

感激した様子で沙幌子が呼びかけてくる。それがくすぐったすぎて、啓史は彼女の手を乱暴に掴んで、歩くスピードを速めた。

3 言葉の代わりに

マンションの駐車場に車を止め、啓史は時間を確かめた。榎原家には、遅くとも沙幌

子の父親である幸弘ゆきひろさんが帰宅するまでには到着しておきたいが……

沙幌子から挑まれた、テレビゲームの十回戦の勝負もまだ二回しかやっていないから、早く三回戦目をやりたい。残り八回をいまからやって終わらせるってのは、さすがに無理だろうか？

玄関に入り、靴を脱いで家上がった啓史は、あとから上がってきた沙幌子が衣裳部屋のドアに手をかけたのを見て、思わず襟首を掴んだ。

「せ、先生」

襟首を掴まれて驚いた沙幌子は、トントンと跳ねるように二歩後ずさった。

「な、なんなんですかあ？」

沙幌子は驚いたような表情で、啓史を見上げて文句を言う。

「決まってる。三回戦だ」

「は、はい？」

沙幌子は片頬をピクピクと引きつらせた。

まさかここで、勝負の話が出るとは思っていなかったらしい。

「きよ、今日は時間ないし、また今度ということ……」

啓史は鼻を鳴らした。

「何言ってる。十回戦なんて、ほんとなら一日で勝負がつくぞ。ごたごた言わずに、来い」

啓史は嫌がる沙帆子の背中を押し、ゲームをするために居間へ連れていこうとしたが、彼女は足を踏ん張って抵抗する。

「や、や、や、やだ、やです。きよ、今日は体調が万全じゃないっていうか……」

啓史は眉を上げて沙帆子を見つめた。

「体調が？」

「そ、そうなんです。だからですね。ママも夕食作って待ってるし……また今度ということ……」

そんな物言い、勝負から逃げられると思っているなら片腹痛い。

なんとか逃れようと、身体を捻^{ひね}って抗^かってくる沙帆子を、啓史は押さえつけた。

「そんな言い訳、はいそうですかって、俺が聞くと思ってるのか？ お前もまたまだ甘いな。今日中に八回やろうってわけじゃない。ほら、歩けよ」

襟首を掴んだまま、啓史は無理やり居間に向かった。

唇を突き出している沙帆子をテレビの前に座らせて、さっさとゲームの準備をする。

彼女の手にコントローラーを握らせた啓史は、すぐにゲームをスタートさせた。試合放棄したけりゃすればいいと思っただが、いったん始めると、沙帆子は態度を変えて戦闘態勢に入った。

面白味など微塵^{みじん}もなく、あつという間に勝負がついた。沙帆子にやる気がなかったわ

けではなく、あまりにも必死になり、力み過ぎたせいだ。

あんなにコントローラーを振り回してたんじゃな。もう少し冷静になれば、それなりの勝負に……

まあ、こいつの技量じゃ、どう足掻^あいても無理か？

沙帆子はまだあまりにあっけなく負けてしまったからか、呆然として画面を見つめている。同情はするが、どうにも噴き出してしまいたい。

笑いを堪えていた啓史は、思わず沙帆子の額を指先でパチンと弾いた。

沙帆子は恨めしそうな目を向けてくる。

「そんな顔するな。まだ七回残ってる」

できる限り、慰^{なぐさ}めを込めてやさしく声をかけたつもりだったのに、沙帆子はまるで侮辱^{おじやく}されたかのように睨^{にら}んできた。

思わずいたぶってやろうかと思ったが、よく見れば彼女は涙目だ。

怯^{ひる}んでいると、沙帆子は手にしていたコントローラーをぽんと床に投げた。

「もうやらないっ！ ぜったいやんない！」

肩を怒らせて叫ぶ。

ずいぶん面白かったが、勝負を放棄するのは頂けない。啓史は凄^{すご}みを込めた目を沙帆子に向け、脅^{おど}すように彼女のほうに身を乗り出した。

「ほお、自分から言い出した勝負だぞ。まさかお前、勝手に放棄するってのか？」
よほど怖かったのか、沙帆子は座ったまま後ずさりとうとする。

「だ、だつてえー」

啓史は沙帆子ににじり寄っていった。脅しが過ぎたのか、沙帆子はバランスを崩し、叫びながら床に背中から倒れ込む。そのはずみで啓史も彼女に覆いかぶさるように倒れた。

「いたた……」

この体勢は……まずいな……

床に転がっている沙帆子を見下ろしながら思う。そして、そんな風に考えている自分の他に、期待に鼓動を速めているもう一人の自分もいる。

「せ、先生……」

「時間がないぞ。早く着替えなきゃな」

彼の理性が発した言葉を、もうひとりの啓史は聞いていなかった。

「そ、そうですね」

啓史を見つめ、沙帆子はうろたえたように口にしたが、その瞳は何か感じているのか、ひどく揺らいでいる。

「き、着替えます」

「手伝ってやるよ」

啓史の下から這い出そうとじたばたしている沙帆子に言う。

「……て、手伝い？」

啓史は沙帆子の胸元に手を伸ばした。それに気づいた沙帆子は、ぎょつとしたように目を剥いた。

「じ、自分で……」

沙帆子は啓史の両腕を掴んで抵抗する。彼の行動を制止しようとするが、力の差は歴然で、まったく妨害にはならなかった。

上着のボタンを外して服をただけさせた途端、沙帆子が息を呑み、両手で胸を押さえた。啓史は彼女の首元にある指輪を見つめた。これを目にするたびに喜びを感じる。

指輪にそっと触れた啓史は、彼女の首筋に顔を寄せた。そして、ぬくもりのある肌に直接唇で触れた。

彼女の肌から発する甘い香りに誘われる。いくら味わっても、もっとと思わせる。

啓史はゆつくりと首筋から下に向かって唇を這わせていった。

「せんせ……」

彼の行為を止めるための言葉だったのだろうが、そこには彼の与える刺激に屈服する響きが含まれていた。

「啓史だ」

かすれた声で、彼女の耳元で命じるように囁く。

そのあと、聞き取れないほど微かな声で「啓史……」と口にされた沙帆子の言葉は、たまらないほど啓史の胸を甘く疼かせた。

抑えきれそうになかったが、啓史はどうか行為を途中でやめた。

沙帆子の身体をぎゅっと抱きしめ、自分を落着かせる。

一度火のついた欲望を抑え込むのは容易じゃない。すでに何度か体験してわかっていることなのに、愚かなことにギリギリのところまで行為を深めてしまう。苦しむのは自分なのに……

かといって、沙帆子を味わわないではいられない。

ぴったりと合わさっているふたりの胸……できることなら離したくない。だが、そんなわけにはいかない。すでに時刻はかなり遅くなってしまっている。沙帆子を早く家に送り届けないと……

啓史は息を整えながら、互いの心臓の鼓動に意識を向けた。そして、彼女の右手に自分の指を絡め、ぎゅっと握り締めた。

沙帆子は、啓史のこうした行為を拒否しない。

だが、もしも……最後まで求められたら、こいつはどうするのだろうか？

拒むだろうか？ それとも……

啓史は頭を振り、馬鹿な考えを振り払った。

いまはこうして彼女を抱きしめていられるだけで、満足すべきだぞ。

彼は顔を上げて沙帆子を見つめた。顔を横に向けて目を瞑っていた沙帆子は、啓史の身体が離れたからか、薄く目を開けて彼を見上げてきた。

桃色に頬を染め、潤んだ瞳でそんな風に見つめられると、ひどくそえられる。

「着替えなきゃな……」

再燃しそうになる欲望を抑え込み、啓史はそう口にした。沙帆子に対してというより、自分に向けて口にした言葉だった。

彼女はひどく恥ずかしげに、いまできる精一杯の身繕いをしながら無言で頷き、身を起こそうとする。

「沙帆子……」

啓史は思わず名を呼んでいた。

もどかしいほどに答への欲しい質問が胸の中にある。

……俺が好きか？

彼の言葉を待つ沙帆子と目を合わせる。だが、結局、その問いは口にできなかった。

沙帆子を俺の実家に連れていった日に、徹兄とつとがこいつに向けて言ったとおりだ。好きだの愛してるだの、自分には照れくさすぎて口にできない。心に湧き上がってくる感情を、そのまま素直に言葉にするってのは、どうにも苦手なのだ。

啓史は言葉を口にする代わりに、沙帆子の唇にそっと自分の唇を重ねた。

4 深い吐息

「おかえりなさい」

玄関のドアを開けると、美美子がにこやかに出迎えてくれた。

「ただいま」

沙帆子に続いて家の中に入った啓史は、美美子に向けて頭を下げた。

「遅くなってすみません」

マンションを出る前に、帰りが遅くなることは電話で告げておいたが、遅くなった理由が理由なだけになんとなく気まずい。

啓史の望みどおり、沙帆子と結婚することになれば、もうすぐふたりは一緒に住むこ

よな。

「啓史君？ どうしたの？」

「先生？」

美美子と沙帆子から呼びかけられ、啓史は顔を上げた。

玄関先で靴も脱がずに考え込んでしまっていたようだ。啓史はふたりに軽く頭を下げ、靴を脱いで上がり込んだ。

「あの、幸弘さんは？」

沙帆子に着替えのために私室に入って行くのを見ながら、啓史は美美子に尋ねた。

「もうそろそろ帰ってくると思うわ」

「そうですか」

よかった。幸弘さんの帰りには間に合ったようだ。

「どうしたの？」

「いえ……」

啓史は心にあるものを言葉にできず、曖昧に答えた。

とになる。となれば、美美子や幸弘が娘と暮らせるのは、今日を入れても三日しかない。

そのことに、啓史はいまになって思い至った。

俺ときたら、娘と過ごす残り少ない時間を、美美子さんから取り上げてしまったんだ

よな。

「啓史君？ どうしたの？」

「先生？」

美美子と沙帆子から呼びかけられ、啓史は顔を上げた。

玄関先で靴も脱がずに考え込んでしまっていたようだ。啓史はふたりに軽く頭を下げ、靴を脱いで上がり込んだ。

「あの、幸弘さんは？」

沙帆子に着替えのために私室に入って行くのを見ながら、啓史は美美子に尋ねた。

「もうそろそろ帰ってくると思うわ」

「そうですか」

よかった。幸弘さんの帰りには間に合ったようだ。

「どうしたの？」

「いえ……」

啓史は心にあるものを言葉にできず、曖昧に答えた。

このひと月ほどの間、啓史は結婚が現実になることだけを願って過ごしてきた。つまり、自分のことばかり考えてきたということだ。

沙帆子の気持ちは当然気にしていたが、幸弘や美美子の気持ちは……何も考えていなかったと言ってもいいくらいだ。

結婚が現実になるかどうかはわからない。それでも、現時点では現実となる可能性のほうが高いと思う。

啓史が沙帆子を手に入れるということは、つまり、榎原夫妻にとつては一人娘を手放すということだ。

だとすれば、娘との時間は、残り三日だけ……

俺はふたりのために、何かできることがあるのではないのか？

それに、俺の家族に対しても、このまま何もせずに結婚式を挙げてしまっていないのか？
いまさらそんなことを考えている自分に嫌気がさす。

まったく、俺は考えなしだな。配慮がない。

周りの人間の気持ちをも、まったく汲もうとしなかった。

だが、こんな風に考えられるのも、沙帆子との結びつきが強くなったからこそなのだ。ようやく、余裕がもてるようになった。……つまり、そういうことなんだよな。

「啓史、ふたりが片付けている間に、ひと勝負しようぜ」

夕食が終わり、いつものように沙帆子と美美子が片づけを始めたところで、幸弘が誘ってきた。

「はい」

啓史が頷くと、幸弘は自らゲームの準備を始めた。

啓史は準備をしている幸弘をじっと見つめた。

幸弘さんは、いまだんないでいるんだらう？

いまでもまだ、結婚が取りやめになる確率は高いと思っっているんだらうか？

「えっ！ ま、またやるの？」

キッチンのほうから沙帆子の声が聞こえてきて、啓史は顔を上げて彼女に視線をやった。

「憩いの時間は、ゲームに決まってるでしょ？」

明るく弾んだ声で応じる母親に、沙帆子はむっとした顔を向けている。

そんな沙帆子を見て、両親が望んでいるのだからゲームぐらいやってやれと言いたくなる。

沙帆子は、これまでとまったく変わりない。結婚式が迫っているということもわかっているのだらうし、両親のいるこのアパートを出て、俺と暮らすのだということも頭に

あるんだろうが……内心では理解できていないから、いつもと同じ調子なのだろう。

お前はしつかりと現実を見つめるべきだぞ、と言ってやらなければならぬのかもしれないが……こいつが現実を見つめたら、俺にとつてはまずいことになるかもしれない。それでも、いずれ沙帆子は現実を直視する。それがいつになるかわからないが、結婚式までには、間違いなくそのときは訪れるだろう。現実を直視した沙帆子が、どうなるのか？

……考えたくもないな。

結局、俺はずっと、崖っぷちに立ったままってことなのだ。

いまの俺がすべきことは……もつともつと沙帆子との時間を重ねて、ふたりの繋がりをより強固なものにすること……

「せ、先生、お仕事忙しいんじゃないですか？」

考え込んでいた啓史は、沙帆子から話しかけられて顔を向けた。

言いなりを賭けた勝負に勝てそうもない彼女は、なんとか勝負を避ける方向に持っていきたいようだ。

それほどに、俺の言いなりにはなりたくないらしい。

そんな啓史の思いを感じたのか、沙帆子はひどく気まずそうに顔を伏せた。

「まだ一時間くらい大丈夫だ」

「あらあ、けつこうたつぷり遊べるじゃない。それじゃ、テニスとかもやりましょうよ」

母親の提案に、沙帆子は噴き出したくなるほど、一気に華やいた顔になった。

まあ、この反応は当然か。テニスのゲームは、言いなりを賭けた勝負と関係ないものな。

「そうよ。ボクシングばつかじゃなくて、今夜はみんなでテニスをしようよ」

「ボクシングもやるわよお。ママね、かなり腕を上げたのよお」

沙帆子の顔が強張ったのを見て、啓史は笑いを堪えた。芙美子さん、ナイスだ。

「ママ……ま、まさか、昼間、ずつと練習してたりしないよね？」

「あ、あら、やだ。ずつとなんてしてないわよお」

芙美子は沙帆子から視線を逸らして言う。どうやら沙帆子が疑ったとおり、芙美子はかなり練習を積んだらしい。やれやれ、この様子では、沙帆子の勝ち危ういかもしれないな。

「ほら啓史、やるぞ」

コントローラーを渡され、テレビを見ると、テニスではなくボクシングの画面が映し出されていた。

どうやら沙帆子の期待も虚しく、まずはボクシングのゲームをするらしい。色々考えてしまったからか、啓史はどうにも真剣になれず、幸弘に負けた。

ひと勝負終わったところで、次は榎原夫婦の対決になったが、ここでも幸弘が勝ちを

取った。そして、啓史と沙帆子の四回目の勝負。もちろん、いくら気が入らないといっても、相手が沙帆子なら啓史の勝ちは必然。あつけなく啓史の勝ちでカタがついた。沙帆子は、悟りの境地にでも入ったのか、まったく反応を示さなかった。

啓史は自分に向けられた美美子の視線に気づき、顔を向けた。

「なんですか？」

「負けてやらないのが不思議ってことよ」

確かに、言いなりの勝負が絡んでいなければ、手を抜いてやらないでもないのだが……

「勝負を挑まれたんですよ」

「挑まれた？　沙帆子から？」

ふたりのやりとりを聞いていた沙帆子は、むっとしたのか小さく唇を突き出した。

次はテニスゲームをすることになった。啓史と沙帆子がペアになり、幸弘と美美子がペアになって、準備が整ったところで沙帆子の携帯が鳴る。

沙帆子は慌てて電話に出た。

「……うん。……千里、ごめんね。……なあに？　あ……ちよ、ちよと待ってて」

電話をかけてきたのは、彼女の親友の飯沢だったようだ。

話しこんでいた沙帆子は、三人が自分を待っているのに気づいたらしい。

「時間かかるの？」

美美子に問いかけられた沙帆子は、母親に視線を向けたまま、携帯の通話口に向かって「それが、いま、テレビゲームしてて」と説明する。

『それって、まさか、啓ちゃん？』

それまで飯沢の声はぼそぼそした声で聞き取れなかったのだが、いまの言葉は啓史にもはつきりと届いた。

……ケイちゃん？

視線を揺らしていた沙帆子が、「ま、まあ、そう」と、居心地悪そうに啓史の視線を避けようとしているのを見て、ピンときた。

ケイちゃんてのは……この俺のこと……か？

尻の辺りがむずむずし、どうにも落ち着かない。

「あ、うん。何時くらい？　……わかった。……うん」

通話を終えて携帯を閉じた沙帆子は、そそくさと膝のところに携帯を置き、コントローラーを手を持つ。その間、啓史の視線を避けっぱなしだ。飯沢の啓ちゃん呼びが聞こえたんじやないかと気にしているらしい。しかし、飯沢が俺のことを啓ちゃんと呼んでいるとは……

まさか沙帆子のやつ、飯沢や江藤と一緒にあって、俺のことを啓ちゃんと呼んでるのか？

そう考えて、なんとなく理解できた。これは、飯沢の考えなのではないだろうか？
自分と沙帆子は教師と教え子の関係。だから、第三者に話を聞かれてはまずい場所では、俺だとわからない呼び名を使うのが得策だと考えて……

たぶん、そうなんだろうな。啓ちゃんという呼び名は、どう考えても俺とそぐわない。口にしてるのを聞いたところで、誰も俺だとはわからないだろう。

嬉しくないが、感心した。

「さ、それじゃやるわよお。幸弘さん、絶対勝つわよ！」

沙帆子の準備が整ったのを見て、芙美子が関とまの声を上げた。

「おお、任せとけ」

ずいぶん気合の入ったやりとりだった。

どうもこの時点ですでに、この夫妻のペアに啓史と沙帆子は負けているような気がする。

啓史とペアの沙帆子は、まったく自信なさげに啓史を見つめる。

「いいか沙帆子、お前、百二十パーセントの力でゆけ」

沙帆子に気合を入れようとして、啓史は強く言ったのだが、刺激が強すぎたのか沙帆子は返事をしない。

「沙帆子？」

「は、はいっ！」

啓史の声にびびったらしく、沙帆子は首を竦すくめて大きな返事をした。

「どうやら、僕らの勝利は確実なようだよ、芙美子ちゃん」

正直、幸弘の言葉は正しいと思えた。

「やってみなければ、結果はわかりませんよ」

「そりゃ、そうだな」

けれど、負けなどありえないと言わんばかりに、自信たっぷりな幸弘は言い放った。

そして勝負は予測した通り、沙帆子と啓史のペアはまるで幸弘たちの相手にならなかった。

勝ちにきた幸弘と芙美子のペアは、沙帆子の苦手とするコースにバンバンとスマッシュを決めてきて、啓史にはどうにもできなかつた。

ゲームに夢中になってる間に、時間は瞬く間に過ぎてしまい、啓史は帰ることにした。榎原夫妻に挨拶をして玄関に向かう啓史に、沙帆子は当たり前のようについてくる。

自分のせいでゲームの勝負に負けたことを気にしているのか、ずいぶんとしょぼくれている。そんな沙帆子の様子は、とても可愛らしかった。

「先生……ごめんなさい」

靴を履いていると、沙帆子が頭を下げて謝ってきた。

「ばーか」

啓史は沙帆子の頭のてっぺんにぽんと手のひらを乗せた。

「……百二十パーセント出せなくて……」

もごもご言う沙帆子に、啓史は「バカヤロ」と軽く叱った。

「あんなの、本気で言ったわけじゃないぞ」

沙帆子の額を、啓史は愛しさを込めてひとさし指でやさしく押した。

「そ、そうなんですか？」

「当たり前だろ。楽しかったぞ、俺は。……お前は楽しくなかったのか？」

「楽しかったです」

はにかむ沙帆子に、啓史は笑みを浮かべた。

「ん」

とても心地よい雰囲気です、帰るのが惜しい。靴も履いてしまっただが、沙帆子から離れたくない。彼女を見つめていると、触れたくて仕方なくなる。

啓史は手を伸ばして彼女の前髪を掴み、くいくいっと愛情を込めて引っ張った。

「それじゃ、また明日な」

啓史はしぶしぶ口にした。

「はい。そ、そだ。明日の朝、千里が話があるって……だからいつもよりちょっと早く

行きます。でも、先生のところにちゃんとお弁当届けに行きますから」

「森沢のことか？」

「な、なんか違うみたいでした。……たぶん、詩織のことじゃないかなって思っています」

「わかった。それじゃ……」

啓史は軽く唇を触れ合わせ、沙帆子の頬をやさしく摘んだ。

「おやすみ」

沙帆子の「おやすみなさい」の言葉を耳にしながら、啓史は外に出た。

土曜日まであと三日……

三日経ったら、俺はあいつとずっと一緒にいられるのだろうか？

それとも……最悪の現実を置き、呆然としている俺がいるのだろうか？

三日後の自分がどうしているのか、いまずぐ確認したい衝動に駆られる。

閉じたドアの前でため息をつき、啓史は車に向かった。

5 自分にできること

車の運転中、携帯が鳴り出した。

もちろん、運転中だから出られない。

携帯はかなり長いこと着信音を鳴らしていたが、そのうち静かになった。赤信号で停まったところで、啓史は素早く携帯を取り出して相手を確認した。

なんだ、敦か……

啓史は顔をしかめた。

こいつからの電話はろくなことじゃないだろう。

いまは特に、とことん用心したほうがいい気がする。また何か、俺を貶めるような、とんでもないことをこいつは考えている可能性がある。

やっかいなやつだよな。……なんでこんなのとつるんでんだ、俺は……

青信号になり、啓史は疲れを帯びたため息を吐き、車を発進させた。

家に帰り着くまでに、三回も電話がかかってきた。

こんなにしつこくかけてくるとは、敦の野郎、やつぱりなんか企んでいるんじゃないか？

実は、先週の金曜日の夜、敦から電話がかかってきたのだが、しょっぱなからものすごい憤りぶりだった。

あの日、敦の従兄妹である飯沢千里に、沙帆子と結婚する事実を告げた。そして敦は、

彼女から沙帆子が高校生であるという事実を知ったのだ。

啓史にとつては、敦の怒りは予想していたことだったから、平然と受け止めた。だが、敦にとつては、それは面白くなかったようだ。俺が仰天するくらいの派手な仕返しをしやろうと目論んでいてもおかしくない。

よほど電話を無視して、先に風呂に入ろうかと思つたが、仕方なくソファに座り携帯を取り出し、敦に電話をかけた。

「俺だけど……」

不信任感を滲ませ、啓史は第一声を発した。

「よお！」

啓史の気分とは正反対の楽しげな声が聞こえてきた。

「何か用か？」

「明日、泊まりに来いよ」

「何言つてんだ、明日は平日だぞ」

「あのな、平日がどうかとって、普通の会話してんじゃねえよ」

「どういう意味だ？」

「お前、結婚すんだぞ。今度の土曜日、あとたった三日しかない」

「……ああ、で？」

「言わなきゃわかんねえのかよ。佐原お前、彼女にのぼせ上がりすぎて、頭のキレが悪くなってるじゃねえのか？」

敦のからかいに乗る気はなかった。

「用件を話せ」

啓史はそつげなく言った。

敦は「にひひ」と意味不明な気味の悪い笑い声を漏らし、ようやく話し始めた。

「つまりだな。お前が独身返上となる前に、最後にもう一度飲もうって言ってんだよ」そんな暇はないと啓史が断ろうと口を開けたところで、「だってよ」と敦が続けた。

「結婚したら、お前。高校生の沙帆子ちゃんがいたんじゃ、そう簡単に酒も飲みに行けなくなるんじゃねえのか？」

確かに、沙帆子を一人で置いて、飲みになんていかないだろう。

もちろん、敦をここに呼んで酒を飲むなんてまっぴらごめんだ。酔った敦は、調子に乗って何を言いつ出すか、わかったもんじゃない。

とすると……確かに、次にこいつと飲むのは、ずいぶん先のことになるだろうな。

「佐原、来るよな？」

その言葉には、敦らしくない頼み込むような響きがあり、啓史は心を決めた。

「わかった。ビール持って行く。いつものでいいか？」

「そんなもんいらねえから、泊まりの荷物だけ持ってこい。お前の結婚の前祝いなんだ。俺が全部準備しとくさ」

敦の『前祝い』という言葉に、啓史は敦がくれたとんでもない代物の事を思い出してしまい、胸に苦いものが込み上げてきた。

もう二度とあんなものを知らぬ間にカバンの中に入れられないようにしなくては……あんなこと二度とするなよ、と思いつき釘を刺してやりたいのはやまやまだだったが、そんなことをすれば、かえって敦を煽るようなものだろう。

ほんとに、こいつ……やっかいなやつだよな。

「わかった」

啓史はため息を呑み込みながら答えた。

「おう、ほんじゃ、明日な！」

すこぶる機嫌のいい声で敦は言い、電話を切った。

啓史は携帯をテーブルに置き、頭の後ろに手を当てて、ソファにもたれた。

明日は敦のところか……

結婚式の日まで、できる限り沙帆子といる時間を持ちたかったんだが。

そう考えた啓史は、今夜の沙帆子の両親の様子を思い返した。

テレビゲーム中の榎原夫妻は、いつもよりずいぶんテンションが高かった。

ふたりは無理をして明るく楽しげに振る舞っている……そう感じた。娘と一緒にいられる時間が残り少ないという事実が、堪らないのだろうな。幸弘と美美子がいまどんな思いでいるのかを考えると胸がひりつく。だからって、もちろん結婚を取りやめる気はない。

あと三日なんだよな。

そう考えて顔が歪んだ。俺ときたら、式までの日数を数えてばかりいる。

だが、式が決行されるのかされないのか、当日までわからない状況なのだ。落ち着いてなどいられるものか。

それでも……このまま当日を迎えてしまっっては、俺は何かしなかったことを後悔するんじゃないか？

最終的にどっちに転ぼうと、いまの俺にできること、俺がしなければならないことが、何かしらあるのでは……

沙帆子が両親と同じ屋根の下で過ごせるのは、もう三日だけ……明後日は結婚式の前夜になるのだから……本当の意味で、ゆっくり過ごせるのは、今日と明日だけってことになるんじゃないのか。

美美子たちは、どう考えているんだろうか？

残りの日々を、親子水入らずで過ごしたいとは思っていないのか？

お互いを知るために、結婚式まで毎日夕食を食べに来るようにと美美子に言われ、その言葉に従ってきたが……

明日、敦のところに行くことになって良かったのかもしれない。

榎原家に行くのは当たり前という気持ちでいたが……やはり、式が近づいたいま、親子水入らずで過ごしてもらわなければならない。

沙帆子という時間が減るのは正直不安だが、学校でも会えるし、帰りも家まで送ってあげる。

そうだ、明日の夕食にレストランでの食事をプレゼントさせてもらうってのはどうだろうか？

余計なことだろうか？

いや、実際聞いてみないことにはわからない。

何もしないよりはよっぽどましだ。

レストランのことなら、伯父の妻である麗子に相談するのが一番だろう。

すぐ実行に移そうかと思ったが、今日はもう時間が遅い。明日になってから相談することにし、啓史は風呂に入るために立ち上がった。